

ケーブル技術ショー 2016 レポート

10 Gbps以上のFTTH製品でベンダー各社が競い合った

7月28日～29日に都内で開催されたケーブル技術ショー 2016では、特に10Gbps以上に対応したPON OLTをベンダー各社が出展して競い合った。各社は実装効率の向上、冗長性、家庭向けの2.5Gbpsから企業向けの40Gbpsまで速度が異なるサービスの同時提供、1Gbpsから10Gbpsへの段階的移行、HFCからの段階的移行など、特徴ある製品で差別化を図った。本稿ではPON関連製品を中心に、ケーブル技術ショー 2016の主要ブースの主な展示をレポートする。PONのほかにも、ケーブルID、4K/8Kなどの新サービスも取り上げる。

●取材・文：渡辺 元・本誌編集長

40GbpsはB2Bに期待 ARRISが10G-EPON参入

伊藤忠ケーブルシステムは今年もGPON系製品で業界を牽引する展示を実施した。GPON、XGS-PON、NG-PON2のOLTを同じシャーシに混在させて実装できるNOKIAのNG-PON2 OLT「7360 ISAM FX-4」(写真1)が展示の中心。2.5Gbps、10Gbps、40Gbpsのサービスを異なるユーザーに同時に提供可能だ。



写真1

40Gbpsは家庭のユーザーにはまだ需要がないが、通信事業者などを対象にしたB2Bサービスとして期待できる。

家庭用に小型化した10G ONUの新製品も展示。デモでは30台以上の10G ONUを「7360 ISAM FX-4」と接続して性能を実証した(写真2)。



写真2

伊藤忠ケーブルシステムではシンクレイヤのブースと同様に、DOCSIS3.1対応CMTSや10G-EPON OLTを実装できるARRISグループ製のプラットフォーム「E6000」も展示した。

関電工は自社開発品の柱上ONUクロージャ(写真3)を展示した。柱上ONUまでは光回線で接続し、ここで電気信号に変えて各加入者宅には既存の同軸ケーブルで送る。新規の加入者には光の引込ケーブルを使用する。HFCからFTTHへの切り替えを徐々に進めていくための製品だ。今年度中に製品化する予定で、すでにケーブルテレビ事業者からの引き合いがあるという。



写真3

このほかCasaSystems製のCMTS「C100G」(写真4)も紹介した。これはSCSKと提携し、輸入後にアセンブリの試験、据え付け作業、保守を関電工が行うという製品だ。

ジャパンケーブルキャストはスマートTVによる地域情報配信サービス「地もっティオ」の新サービスとして、プライバシーに配慮した見守りサービスを展示した。遠隔地に住む高齢



写真4

者の家族のテレビ端末のON/OFFを状態監視することで、プライバシーを侵害することなく高齢者を見守る。具体的には、高齢者宅のテレビが消えると、家族のスマホに知らせる(写真5)。テレビ画面を使って孫の写真などを送受信できる機能も加え、見守りサービス利用を促す工夫をした。



写真5

「Hybridcast LIVE!」も注目を集めた。「JC-data」の新しいサービスとして、実証実験を行っているものだ。デモではコミチャンの画面上に釣りビジョンのアイコンを表示(写真6)。このアイコンを選ぶと、ハイブリッドキャストで釣りビジョンのIP動画サービスに切り替わる。コミチャン画面を有料IP動画の入り口に